【１０年後の担い手育成を目指して】

Ａさん：　私のところの会社は、有機農業専業農家です。有機農業を始めたのは、今からちょうど２３年前です。それまでは、２４歳の時にＵターンして、親父を手伝いながら普通の慣行農業（従来の方法での農業）をやっていました。

ユズを作っていると結構農薬を使うのですが、そのユズを頭からかぶると、どうしても農薬にいじめられて皮膚がぶつぶつになるんです。農薬に負けないために塗り薬を塗りながら農薬散布していたら、どうしても面白くありませんでした。有機農業が大変楽しく思えたのは、自分が作ったものに対して、自分の労働時間に見合った価格設定ができるという、それに一番魅力を感じたんです。

有機農業の場合リスクが高いですが、何のためにその労働を続けるか、何の作業をしているのか、何の意味があるのか、失敗したらどういうことが悪いのか、そういう記録を付けていくことをずっとやっていくと、それなりに安定生産ができてきました。うちは基本的に、今でいう地産外商です。全て都心で、今まで有機農業運動体としてやってきた流通と一緒に、「じゃあ町を耕そう、耕すのは流通、田舎を耕すのは農家だよ」という関係で、ひたすら町に向けて野菜を売ってきました。

ただ、昔は虫さえ食べてなかったらいいという時代でしたが、昨今、いろんなところに有機野菜が一般化してきました。そうなると、量販店で、いくらＪＡＳマークがあるからといってもなかなか認めていただけない。それが価格帯だったり、求めている人の思いだったり、考えだったり、デザインだったり、いろんなところがあって。そういうところをどのようにして伝えるかというのが商品化なんです。そのためには、例えば、商品化するための裏付けが必要だと思うんです。それが新しい出荷場ですね。昨年建築したんですが、鉄筋コンクリートだけで出荷場を作るのではなく、高知県だから、地場のスギ、ヒノキを使って、地元の大工さん、左官さん、電気屋さん、とにかく地元を中心につくっていこうと。有機農業は基本的に環境が大事と思っています。そういうことを末端の買ってくれている人達に伝えていくのが大事と思うんです。

特に高知県もそうなんですが、林業産地、ダンボールでものを売るよりは、本当は昔みたいに、木箱を打って、叩いて、キュウリとかナスとかを５キロ、１０キロ入れて量販店に置くとか、そっちのほうがずっと気が利いていると思うんです。それはそれなりに付加価値が高いと思う。けど、コストがかかる、そのコストをどこで吸収するかなんですが、これを環境の問題なのか、農業の問題なのか、林業の問題なのか、どこが考える問題なのか、いろいろ問題があると思うんです。

こういうふうにせっかく集ったんだから、皆で、今、結論を出すのではなしに、今後１０年先にやっていこうという目標みたいなものを掲げてもらって、次の世代に繋げていかなくちゃいけないと思うんです。

ただ、高く売れるからするではなく、何のためにするか、それが一番大事。イ

ンターネットだったり法人フェアだったり、とにかく今の若い人というのは、有機農業に対してすごく興味があり関心があるんです。有機農業を、お金をもうけるためにやりたいとかいう人はごく稀で、例えば、賃金が安くてもいい、好きなことをやりたい、ずっとそれでもいいから続けていきたいと思っています。そういう人達を育てるためには、やはり、有機農業だとか自然教育といったものを小学校の時から逐一体験させなくちゃだめと思うんです。

実際、自分の身体で体験したことや、小さい時にしたことは、絶対年を取っても覚えています。そういう体験農場とかモデルタウン事業みたいな形でやるのがいいんでしょうが、できたら、実際にやっている農家と、地域の人と、地域のお年寄りと小学生を交えた、例えば体験農場、有機農業リサーチファームみたいな形のものを是非今後、各地域でつくり、その中で、本当の農業の良さとか大変さとか、良いところも悪いところも、一生懸命教えれば、１０年先には農業の良さがますます彼らに分かると思うんですね。それがやはり大事です。

今、次の世代を担ってくれている若者達が、実際うちにいるんですが、彼らに言うのは、「今、うちを卒業しても困るでしょう」と。まず、何が困るかというと売り先がないんです。うちのチャンネル（販路）で一緒にやっていくようにして、できたものは、うちの商品化とか、商品力とかと同じような形にして、例えば、鮮度も、入り数、グラム数、値ごろ感、そういうもの（基準を）をきっちり出してやっていきたい。地域に就農した子達に、ちゃんと売り先があって、安定生産できる技術とかそういうのを（身につけられるように）今後関わっていく時には、それでいきたいと思っているんです。

是非、そういう栽培指針づくりを行政の方にも応援していただいて、各普及所、研究機関など、有機農業を本当に真剣に次の世代に残せるようなシステムを是非皆さんで、１０年先には絶対形になるというものを作っていただきたいと思っております。

知事：　今、最後に言われた、１０年先にきちっとした栽培指針みたいなのを定めていくとい

うお話ですよね。有機農業は品質が安定しなかったりして、誰でもできるものじゃなかったりするというところが、すごく難しいんだろうと思うんです。人によって結構流派もあったり、やり方も違ったりする。いわば、そういう不安定だったりするのを何とかするために、近代農業というのは農薬とか使って安定をさせてきたというところがあると思うのですが、その逆をいくわけですから、その分の苦労はあるだろうと思います。

今、県で一生懸命やろうとしているのが、ＩＰＭをはじめとした環境保全型農業で、できるだけ減農薬でという形での方向。今、Ａさんがおっしゃられたように、１

０年後ということを考えていった時には、その先端、先に行くものとして、是非、今から着々とその準備は進めていくことが重要だと思うんですよ。

そういう意味において、環境保全型農業というものの頂点にあるのが、本当の意味で有機農業。品質が安定していて、どういう方でも、いろんな人の経営にも向くような形での有機農業というものを確立していくことだと思うんです。

できるだけ、どんな人でもある程度できるというものにできるかどうかが、ここが非常にミソ。それがためにも、ガイドラインづくりについて、今から準備を進めておくべきなんだという、それはご指摘のとおりだと思います。

頂点にあるのが環境保全型農業の究極の姿だと思っていますので、そこのところは引き続き取り組みを進めさせていただきたいと思います。

もう１つは、やはり小学校の段階ぐらいから、そういう経験をしておくことが非常に重要、食事も含めて、もっと言えば、農業自体の体験を是非してもらいたいです。

農業大学校の学生さんと毎年、懇談の場をもっているんですけど、「何で農業をやりたいと思うんですか」という質問をした時に非常に印象深かったのが、「親戚が農家だったから」、実家が農家だというのならわかるんですが、「親戚が農家」、もしくは「近所に農家の人がいて、子どもの頃よく遊びに行っていたから面白そうだと思っていたので」という動機が非常に多いんです。

南国市で一生懸命取り組み、できるだけ全県で進めようとしているのは、給食で地元の農産物をできるだけ使う。更には、農産物を使う時には誰々君のおじいちゃんの作った何々と言って出して食べさせる。もっと言えば、それに加えて農業体験とかをさせる。小学校の時もそうでしょうけど、就職を意識する中学校、高校の段階というのもできれば必要だと思います。今、そういうインターンシップみたいな形で増やしているんですけどまだ足りないと思います。

農業大学校の生徒が、「僕は農業が大好きでやりたいと思ったので農業大学校に行きました。」と言うんですけど、３分の１から２分の１弱くらいの子が「残念ながら実家が農家ではないので（土地がないので）農家になれません。」と言うんです。そこが私、非常に残念だと思って、さっきおっしゃった話と違いますけど、そういう意味においても、土地、耕作放棄地になる前の土地であるとか、できるだけ早く就農できるような土地を、そういう若い人にも構えてあげたいなと思っています。そういうシステムづくりを、もっと進めていかなければいけないなと思っているところです。

Ａさん：　有機農業にする場合に一番大事なのは、有機認証を取るまでの３年の移行期間中をどうするかです。どこに売るか、生活をどうするのか、そこのところの、リスクが高い。例えば、うちが耕作して認証を取っている部分を次の新規就農する子とか卒業する子に譲ることは出来るんです。けれど、新たに始めようと思えば、準備段階から入って来てもらわなければいけない。そういうところをもう少しフォロー

をしていただければ、今の若い子は進んで有機農業のほうに移行すると思います。
　その辺の既存の慣行農業をやっている人達もそうなんです。ＩＰＭをやって、減農薬をやっている農家が有機に移行する時に、やはりリスクを伴うんです。今まで農薬とか化学肥料を使ってきたのを徐々に減らしていかなくちゃいけない。３年間使っちゃ駄目なんだから、その間の生活補償みたいに、何かがなかったらなかなか進まないんです。各県単位でするのは、なかなか大変なことなんですけど、今の国の中で考えていかなくちゃいけない。そのへんを是非お願いしたいと思います。

知事：　新しい技術の習得だけから言ったら、特に研修者に対して、さきほど１５万円という話もしました。新規の方だと多分使えると思うんですけど、移行については、さっき聞いたら、今だと何もできない。何か、ちょっと考えさせてください。